

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 14 回 名人の芸～笑いの質

人を貶（けな）したり、いわゆる下ネタや楽屋落ちで笑いを取ることは、芸人としては最低という価値観のあった時代、今はもう、懐かしくなった。下品でやたら煩（うるさ）い、ユーモアとはかけ離れた貧相な「笑い」が横行する現代で、昔の名人・芸人は、その人そのものが「芸」だった。もちろんそれを支えた客が「イキ」だった。今回はそんな話をいくつか...いずれも受け売りである。

亡くなった柳家小さん師匠、今時だし、師匠に何かあると大変だからと、弟子たちが相談して、師匠にも携帯電話を持ってもらおうということになった。「なんだい、こりゃ」と言いつつも、携帯電話を持つようになった。ある日、お付きの弟子二人だけで、内緒で蕎麦屋に入り、健康上とめられていた天ぷらそばを、うまそうに平らげていたその時、けたたましく携帯が鳴った。「師匠、お電話です」と弟子が渡す。「ふむ、ふむ、」機嫌の悪そうに受け答えした後、いきなり大きな声で、

「ところでさあ、俺がここにいるの、何でわかった？」

（春風亭小朝独演会にて）

やはり亡くなった彦六と言われた林家正蔵。八〇歳を過ぎてから「お役に立ちたい」と老人ホームへ慰問に行った。「師匠、如何でした？」あの、独特の口調で、ゆっくりとしゃべり始めた。「はい、なかなか皆さんお元気で、よろしゅうございます。あたしより年上の人が二人しかいませんでしたよ」

雪がしんと降った翌朝、一部凍りついた道に出て、なんでもかんで散歩すると、子供のように言い張る師匠、心配だからと付いていく弟子の前で、あっという間に三回も転んでしまった。「大丈夫ですか」と駆け寄る弟子に一言。

「二回目、起きなきゃよかったあ」（林家木久蔵独演会にて）

酒が人生だった五代目古今亭志ん生、朝は歯も顔も洗わず、菊正（菊正宗）をまず一杯。高座へ出る時間にはほとんどいい気分。「毎度、おなじみの...」と言ったきり、鼾（いびき）をかいて寝てしまった。今なら客が怒り、金返せーって賠償問題。「いいから、寝かしてやれ」と当時の客。突然目覚めた志ん生は「お後（あと）がよろしいようで」と言って高座を下（お）りていった。場内、万来の拍手だったそうである。

ほのかで、のどかで、実に人間的な、時代だったかもしれない。少しでもそんな雰囲気肖（あやか）りたいと思っている。